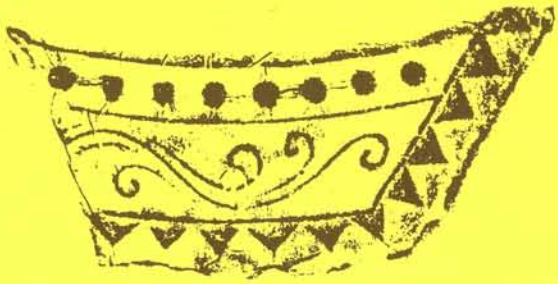
福岡市埋蔵文化財調査報告書第279集

Ohashi E Ruins 3rd.

大橋Ｅ遺跡３次調査の報告



1992

福岡市教育委員会

目　　次

◇　ごあいさつ……3
◇　はじめに……4
◇　調査の概要……6
◇　遺構の解説……8
◇　出土遺物……12
◇　古瓦拾遺……14
◇　おわりに……18
◇　Summary ……19

凡　　例

本書は福岡市教育委員会が1990年度に実施した大橋Ｅ遺跡の第３次調査の報告である。

本編は調査担当者が編集、作成した。

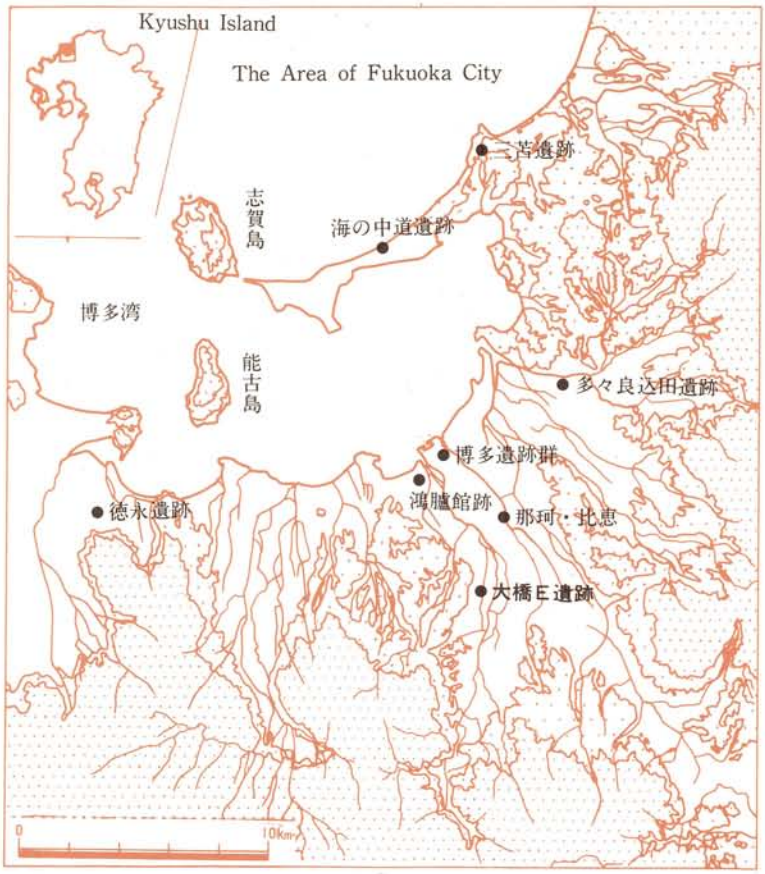
５頁の地図は、国土地理院発行の５万分の１福岡を使用した。

遺構図中の方位は、磁北である。

調査によって得られた資料は、福岡市埋蔵文化財センターに本収蔵の予定である。

遺跡略号　OHE－３　調査番号9032
調 査 地　福岡市南区三宅一丁目1108番２
分布地図番号　39 A－14
開発面積　246.24㎡　調査面積　80㎡
調査期間　1990年９月４日～1990年10月４日

表紙　老司式軒平瓦拓影



ごあいさつ

福岡平野は古来より先人の生活の場であったようで、緊急発掘調査によって明らかになった遺跡も、年を追うにつれて数を増してきました。

ここに報告するのは共同住宅の開発に伴う埋蔵文化財の調査です。発掘によって見つかったのは、中世の溝や土壙で、出土した遺物には、土器類のほか瓦などがあります。調査区の西200mの地点は、奈良時代の寺院跡、三宅廃寺に比定されています。今回の調査は断片的ですが、古代の人々の暮らしを垣間見るように思います。

さいごになりましたが、調査を実施するにあたって御協力いただいた㈱西日本住センターならび関係者各位に心より御礼を申しあげます。

1992年1月10日

福岡市教育委員会
教育長　井　口　雄　哉

はじめに

発掘調査に至るまで

1990年６月、株式会社西日本住センターから南区三宅一丁目1108番２について埋蔵文化財事前審査願が提出された。これを受けた埋蔵文化財課では、予定建築物が地表下に与える影響が大きいこと、近接地の調査で埋蔵文化財が包蔵されている可能性が高いことなどから７月５日に試掘を行なった。試掘では土壙、溝、柱穴が確認されたため、文化財保護法57条２項に則って発掘調査が必要との判断を示した。その後、同年９月に調査を行なうとの方向で協議が整い、両者間で契約が交わされた。発掘調査は、同年９月に実施、資料整理は平成三年度に行なうことになった。

調査の組織と構成

調査委託　株式会社西日本住センター
福岡市中央区大名一丁目９番33号
代表取締役　緒方宝作

調査主体　福岡市教育委員会埋蔵文化財課

調査総括　埋蔵文化財課長　柳田純孝(前任)
埋蔵文化財課長　折尾学　同第二係長　柳沢一男（前任）　同第二係長　塩屋勝利　文化財主事　横山邦継　事前審査担当　吉留秀敏

庶務担当　松延好文（前任）　吉田麻由美

調査担当　常松幹雄

調査参加者　石川洋子　上野龍夫　神尾順次
川崎道子　窪田慧　小城信子
大長正弘　陳雅智　徳永静雄
徳永ノブヨ　西本スミ　野口ミヨ
萬スミヨ　広田熊雄　吉住作美

周辺の立地と環境

申請地は、福岡平野を貫流する那珂川の中流域西岸にあたる。西に油山山塊から派生した標高30ｍ程の低丘陵がある。明治30年代の地図によると、周辺域の多くは田地で、南東部と北側に各々溜池が見える。

申請地の西約100ｍでは三宅廃寺比定地の調査、北東に約200ｍの地点では、大橋Ｅ遺跡群の調査が行なわれており、詳細は各報告を参照されたい。

大橋Ｅ遺跡の１次の調査では、弥生前期（板付II式）から古墳時代前期にかけての土壙群が検出された。包含層からは弥生中期の土器、扁平片刃石斧の他、細形銅剣と考えられる鋳型破片が出土している。

２次調査では、弥生前・中期の土壙、中世の溝が検出された。不定形土壙に伴って朝鮮系無文土器が出土している。この他に遺構に伴わないが越州窯青磁碗やスタンプ文のある新羅系土器、斜格子のタタキをもつ瓦片などが出土しており、遺跡近くに官衙施設のある可能性を示唆している。

三宅廃寺[1]の調査は、1977年11月から翌３月にかけて行なわれた。瓦溜や布掘りの総柱建物(２×２間）１棟、３×４間の建物１棟が検出された。老司Ｉ式を主体とする瓦類、黄銅匙・箸、石帯

巡方、玻璃製品などが出土している。

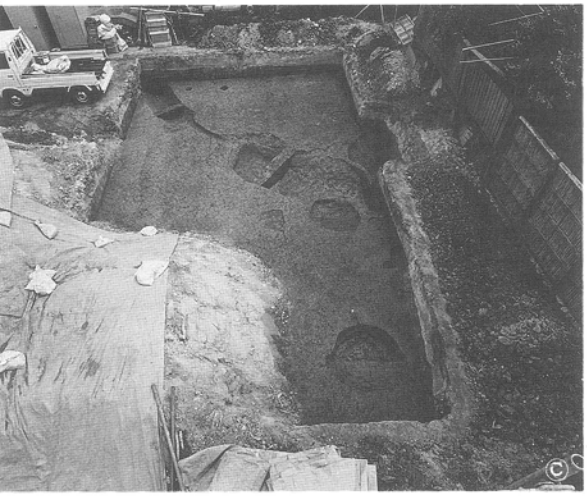
三宅廃寺周辺には、三宅瓦窯址、岩野瓦窯址、南2kmに老司瓦窯址などが知られているが、今回学史的位置づけを行なうに到らなかった。[(2)]

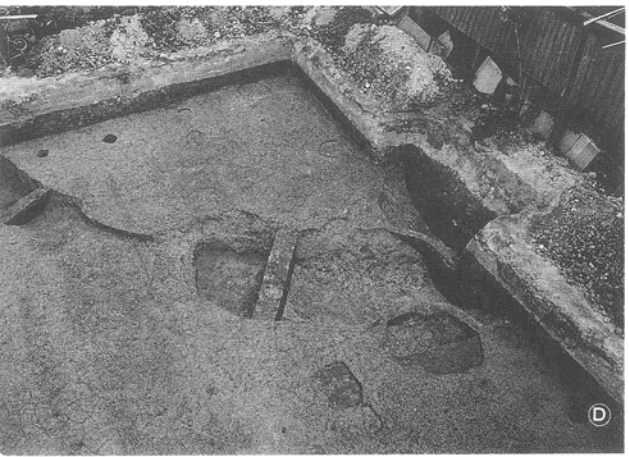
註

(1)小林義彦・横山邦継「公園関係埋蔵文化財調査報告書Ⅰ」『福岡市埋蔵文化財調査報告書第220集』福岡市教育委員会、1990年。

(2)二宮忠司(編)「三宅廃寺発掘調査報告書」『福岡市埋蔵文化財調査報告書第50集』福岡市教育委員会、1979年。

1．大橋E遺跡　2．三宅C遺跡群　3．三宅B遺跡群　4．和田A遺跡群　5．和田B遺跡群　6．若久B遺跡
7．三宅A遺跡群　8．大橋D遺跡　9．大橋C遺跡　10．大橋A遺跡　11．大橋B遺跡　12．和田田蔵池遺跡
13．和久A遺跡　14．野間A遺跡　15．野間B遺跡　16．横手遺跡群　17．寺島遺跡群　18．井尻C遺跡群
19．井尻B遺跡群　20．五十川遺跡群　21．諸岡A遺跡群　22．板付遺跡　23．那珂深ヲサ遺跡　24．比恵・那珂遺跡群
25．博多遺跡群　26．鴻臚館





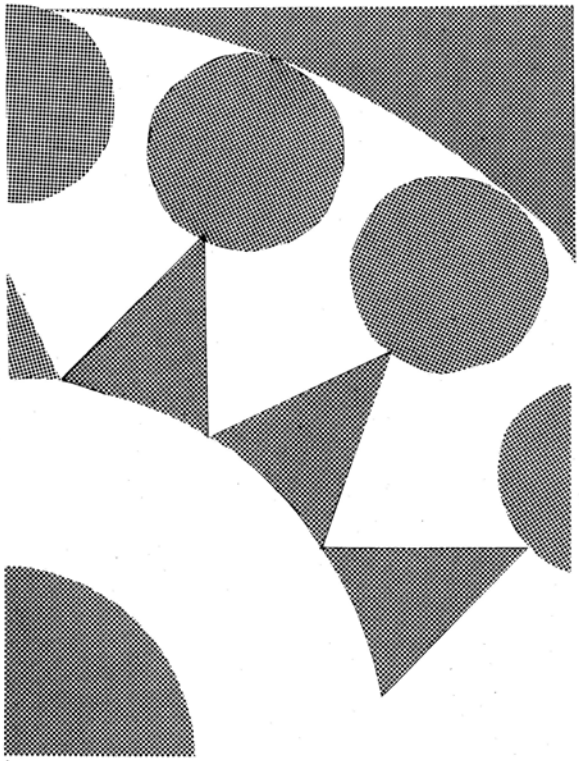
調査の概要

発掘調査は、９月４日から開始した。バックフォーで表土剝ぎを行なうわけだが、土の持出しはせず敷地内で表土と排土を処理するため、試掘調査で遺構が確認された部分を中心に検出作業を始めた（A）。

遺構検出の結果、試掘トレンチにかかっていた溝は、直線的なプランではなく、調査区南東部を軸に弧を描いて回ることが判った。

また調査区の西側には円形土壙２基が確認され、各遺構とも土層ベルトを残して掘り下げにかかった（B）。

Cは、西側から見た調査区である。溝は、幅20cmほどの細い溝でつながっており、南壁の部分では土壙に切られていた。Dは溝を拡大して撮ったもので、細い溝の部分は、橋梁的な性格のものと考えられる。柱穴も検出されたが、相互の関係は不明であった。

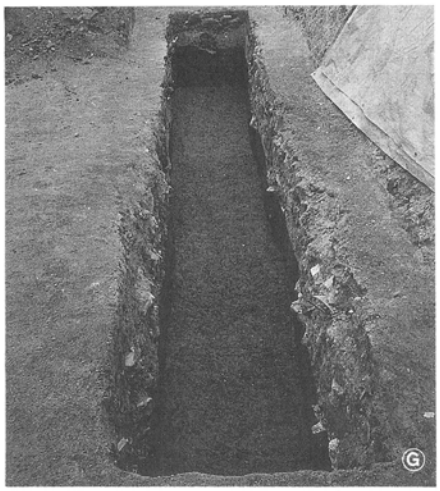


遺構実測を進めて、レベリングの終了した部分の埋め戻しと併行して遺構の広がりを確認(E)。試掘にかかっていた長方形の土壙は、墓壙の可能性があったので慎重に掘り下げたが、決め手となる遺物等は出土しなかった（F)。

ユニットハウスに沿って南北方向の試掘溝を入れたが遺構は認められなかった（F)。引き続いて東西方向の試掘溝を入れたが遺構の広がりは確認できなかった（G）ので、調査区の拡張を断念した。

調査中に通過した台風は一つだけで、殆ど影響はなかった。

10月３日に遺構実測と機材の持出しを行ない、翌４日埋戻しを終わって現地作業を終了した。



遺構の解説

検出された遺構は、土壙３基、溝、柱穴、墓壙状の掘り込み１基である。溝は、外径20m程で、橋梁部を有する。橋梁部の細い溝は東壁と南壁に接する溝を結ぶ暗渠の可能性がある。削平をうけており、全体のプランを知りえない。

土壙はSKと表わすが、SK-01と02は、土層の状況が似ており同時期と考えている。SK-03は溝に切られている。柱穴は残りが悪く、土器の細片以外出土していない。

溝は東壁部で幅95cm深さ40cmをはかる。南壁

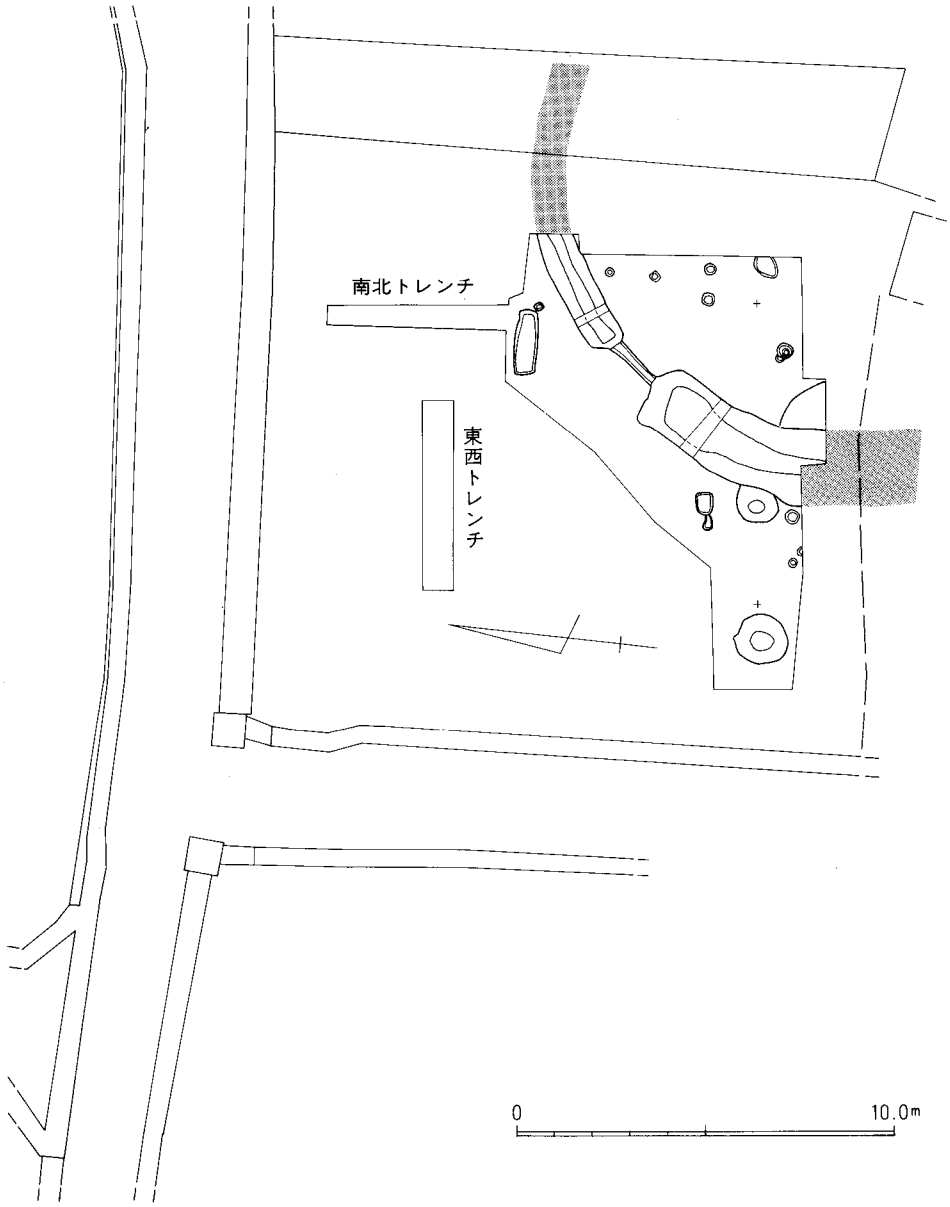


Fig. 1 大橋E遺跡3次調査区位置図 （縮尺1/200）

部は170cmから215cmの幅で深さは50cmから65cmをはかる（Fig.４参照）。

SK-01は径140cmで深さ58cmをはかる。土壙中位で地山は、風化のすすんだ灰白色を呈するようになる。

SK-02は径115cm深さ28cmをはかる。

墓壙状の掘り込みはSX-01とした。長軸175cm、最大幅60cmをはかり、深さは20cm弱である。

以上手短であるが遺構の配置と法量についての解説を終わる。

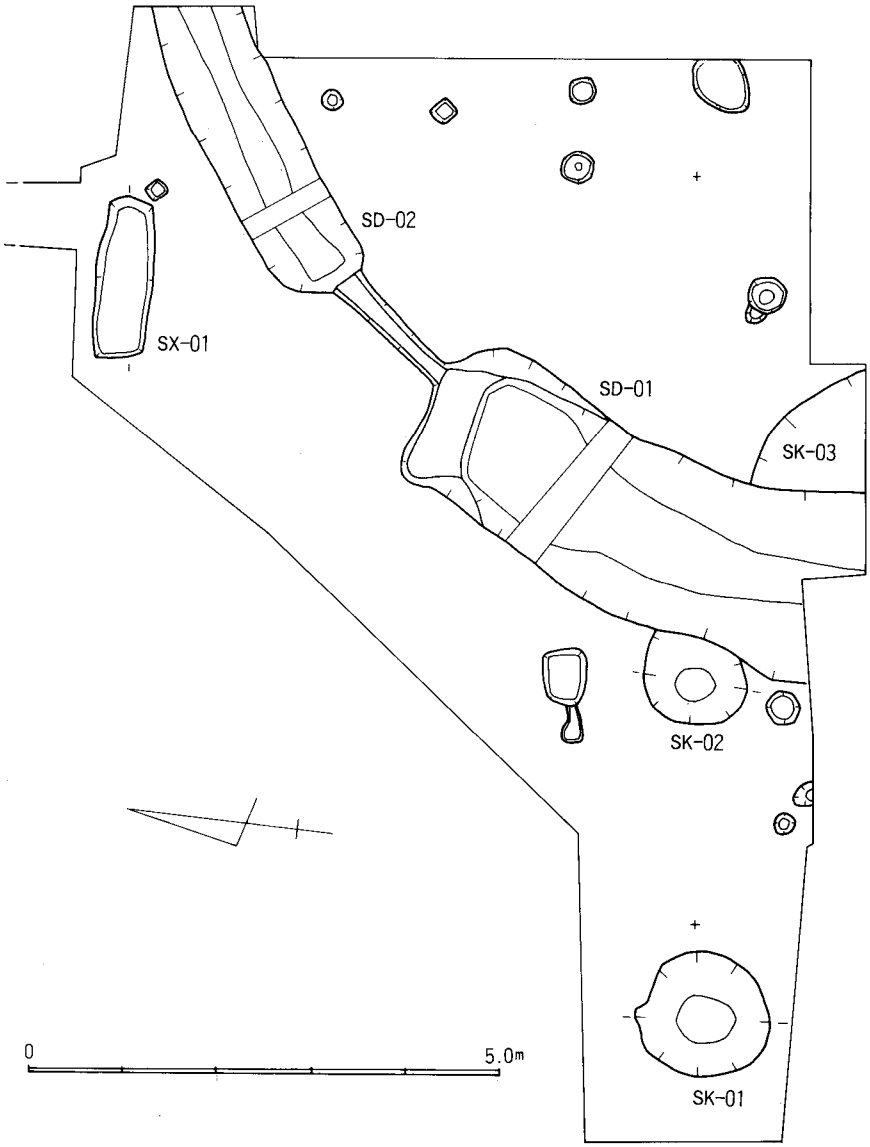
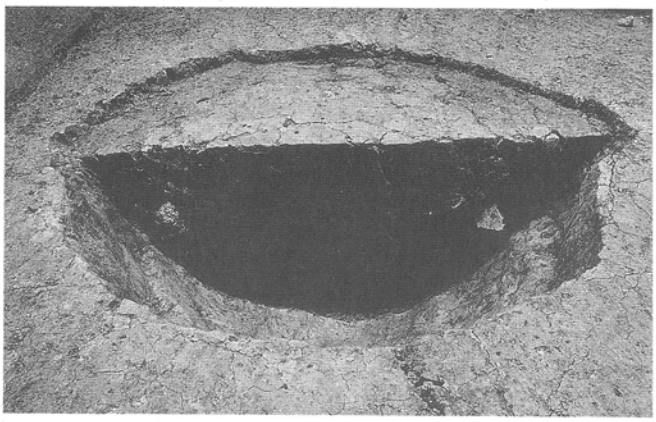
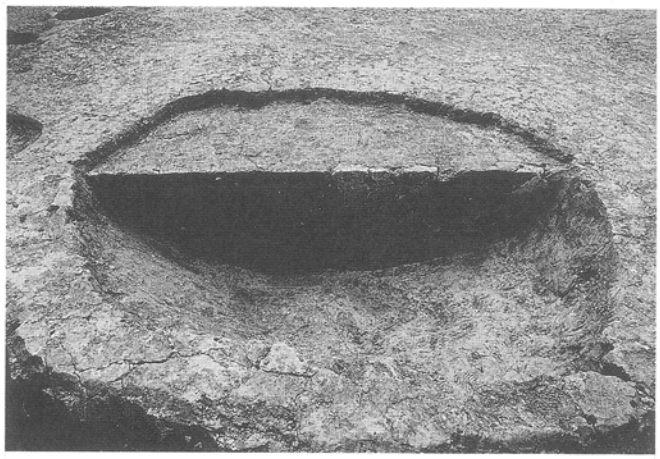


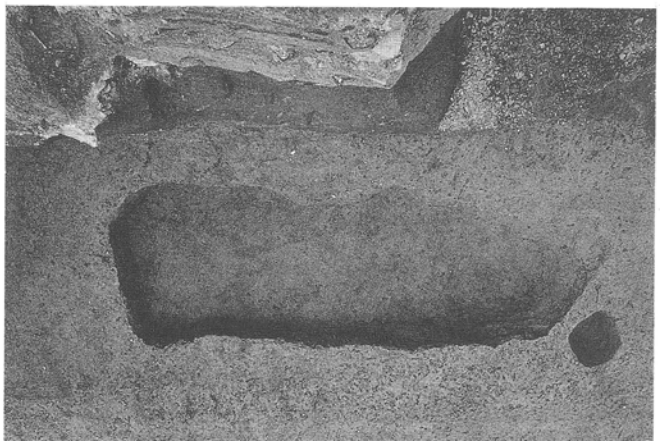
Fig.２ 大橋E遺跡3次調査遺構配置図 （縮尺1/80）

遺構面の地山は、灰白色のローム層で、土層図にロームとしているのは、埋土中に混入したものである。SK-02・03は、ともにSD-01によって切られており、SK-01も含めて溝に先行すると考えている。

溝はSD-01とSD-02、そして両者をつなぐ細い溝とに分けて遺物の取り上げを行なったが、接合資料から同時期の溝の可能性が高い。SX-01は、現状では墓壙とする決め手に欠けている。







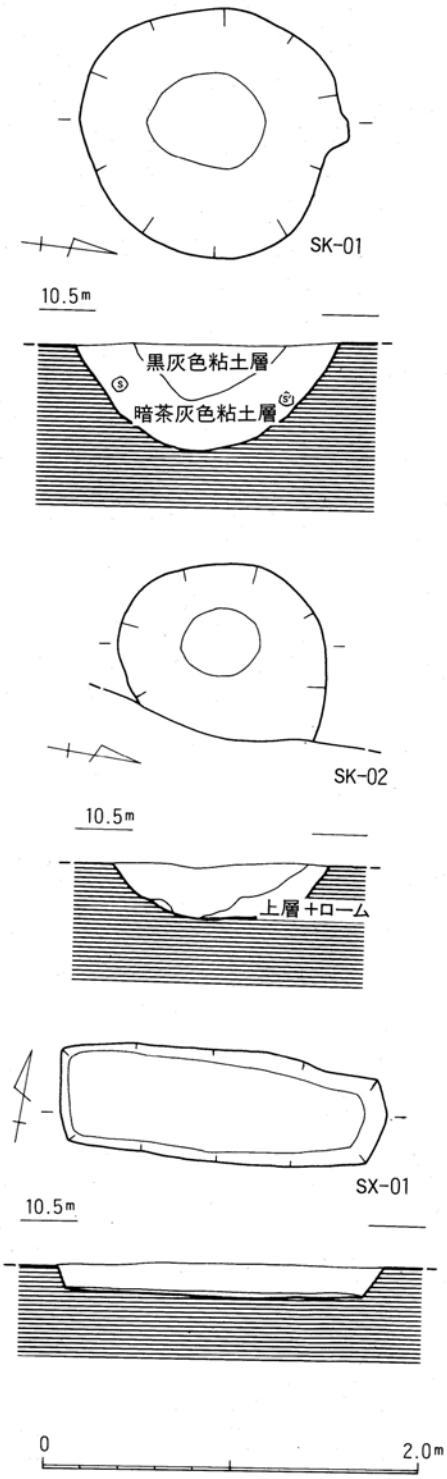
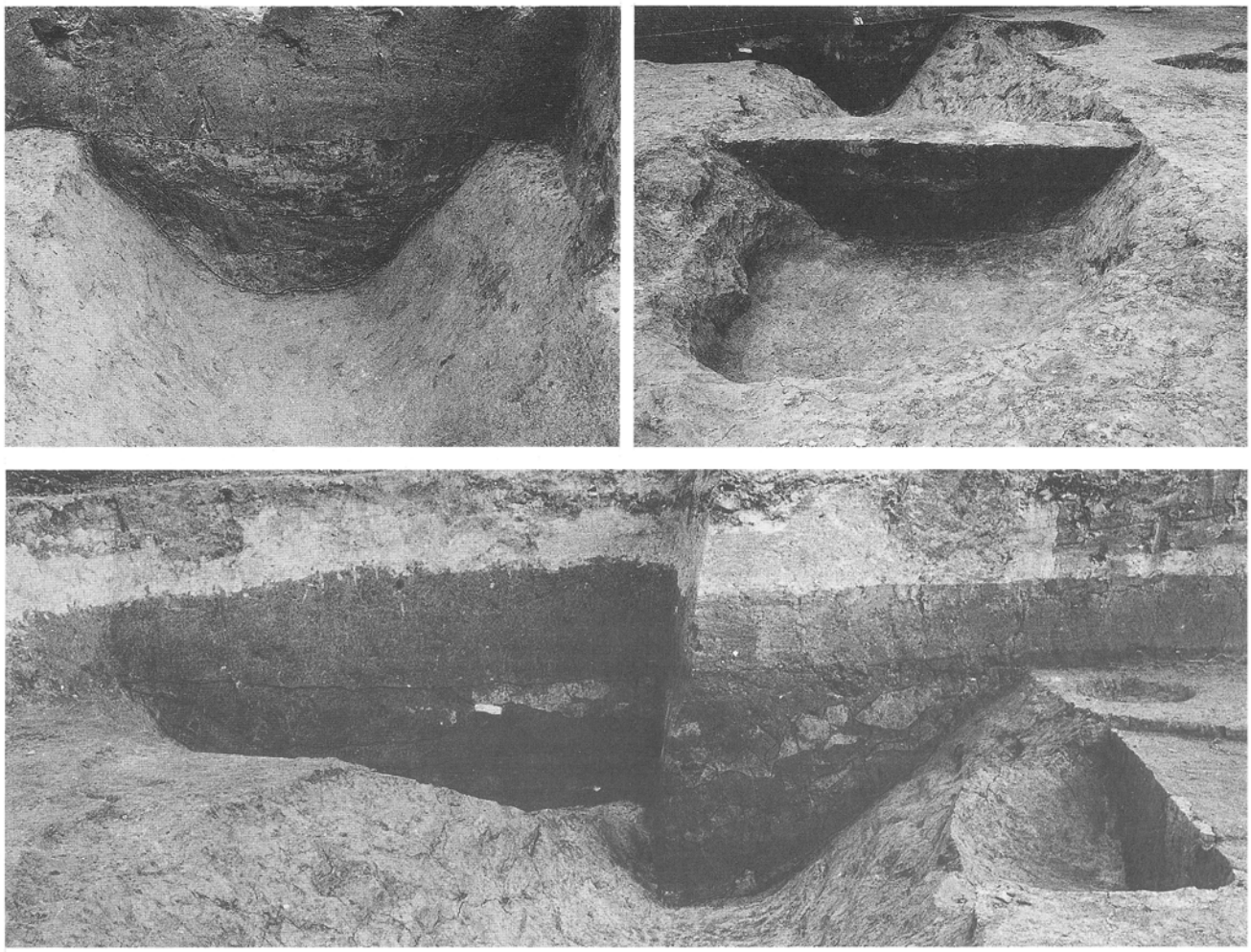


Fig.3 SK-01・02、SX-01 遺構実測図(縮尺1/40)



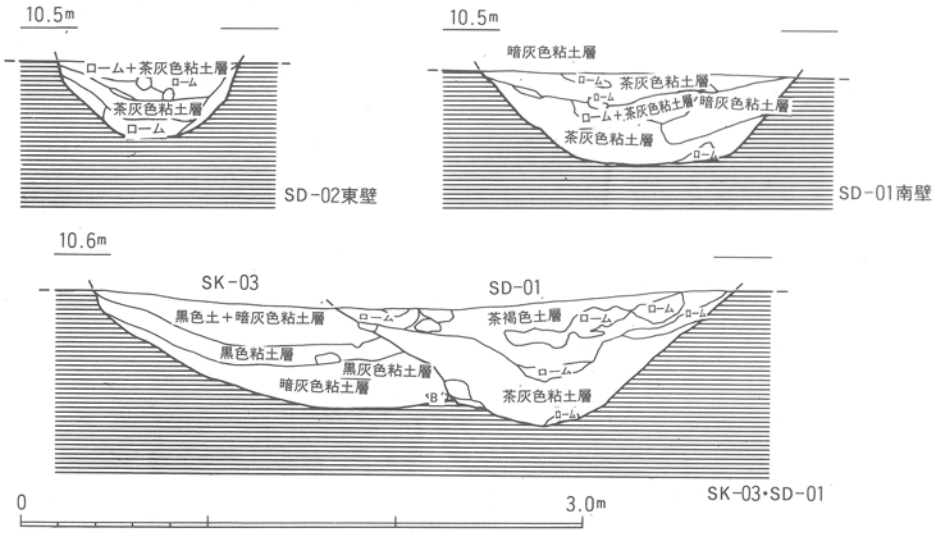


Fig.4 SD-01・02関係土層実測図(縮尺1/40)

出土遺物

SK-01では、1～5の遺物が出土した。1は、土師器椀の小片で、赤褐色を呈する。2は、須恵器の杯の小片で、暗黄灰色を呈し、焼成不良である。3は、土師器杯で、底部はヘラ切り底である。4は、須恵器甕の胴部破片である。5は、平瓦の破片で、内面に布目圧痕をわずかに留めている。

SK-02では、6～8の遺物があげられる。6は、須恵器杯の蓋で、宝珠のつまみを有するもの。7は、須恵器杯の小片で、屈曲部の内側に底部を付している。8は、玉縁つき丸瓦の破片で、内面には布目圧痕、外面には轆轤成形のナデ痕が伺える。

溝出土の遺物として9～17がある。9は、磁器の蓋で、素土は白濁色、黄白色の釉を付す。轆轤成形により、下部を削り出している。10は、青磁碗の底部で、暗いオリーブ色の釉を高台の外面まで付す。素土は青味を帯びた灰色を呈す。

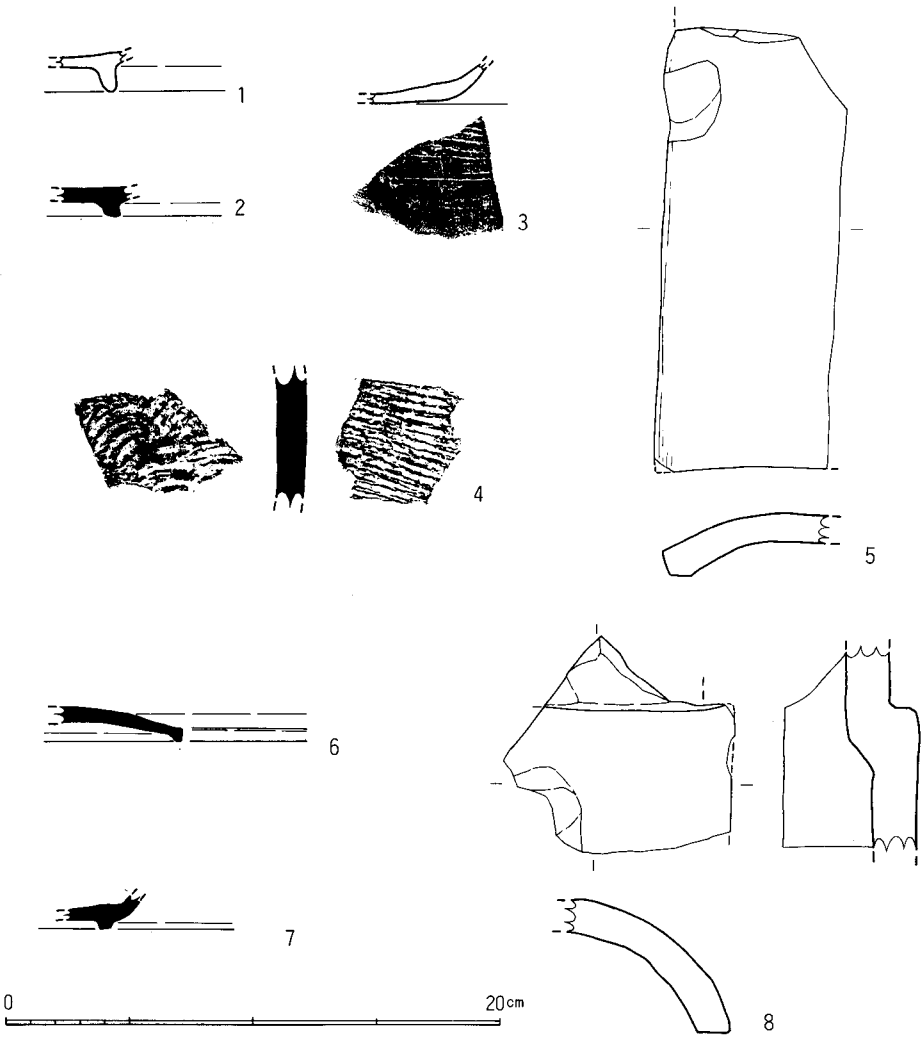


Fig.5 SK-01・02 出土遺物実測図 (縮尺1/3)

11の糸切底土師皿は、口径7.9cm、器高1.6cmをはかる。12の糸切底土師皿は、口径8.5cm、器高2.1cmをはかる。13は須恵器甕の小片で、内面に同心円のあて具の痕、外面に細かい格子状のタタキ痕を残す。14も、須恵器甕の小片である。内面にあて具の痕、外面に平行タタキの痕を有す。15は土師器の把手で、粗砂粒を多く含んでいる。16は、浅鉢形の煮沸具で、外面に煤を付す。内面は、細いハケ目を施している。17は、土錘で、ほぼ完形を呈す。

以上、遺構出土の遺物中、図化しえたものについて説明を行なった。

SK-01と02は、埋土の状況が似ていることから同時期の遺構と考えた。SK-01の遺物は、時期幅を限定しがたいが、平瓦が、薄手のつくりであることから平安後期以降を下限としたい。溝の時期は、土師皿の口径が小さくなる傾向や、青磁片の形状から、14世紀以降の廃棄と考えたい。

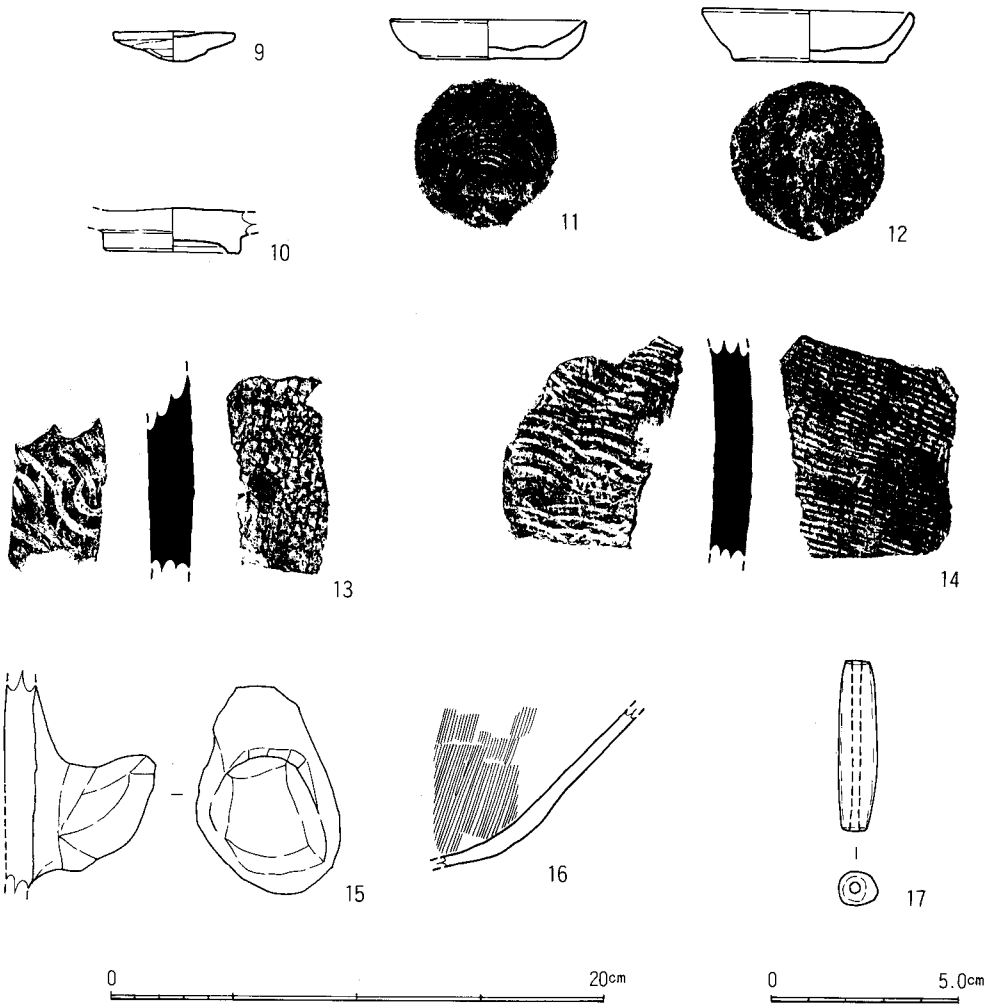


Fig.6 溝状遺構出土遺物実測図(縮尺1/3)

古瓦拾遺

入江金之輔氏採集資料の紹介

三宅一丁目の発掘調査は、道に接しており、何事かとお尋ねの方も少なくなかった。そうした折、斜向いの大橋四丁目にお住いの入江巖氏より、御尊父金之輔氏採集の瓦があることを伺い、拝見させていただくことになった。お持ちいただいたのは、陶片や瓦片の入った紙箱と軒平瓦一面である。とくに軒平瓦は、瓦当面の一部を除いて原形を保っており、平瓦三面を含めて、ここに報告させていただく(Fig.8・9)。

採集者の入江金之輔氏は、平成二年八月、齢九十二で既に鬼籍に入られており、拾得の仔細は詳でない。巖氏の談によると、昭和三十年代の後半、三宅付近の田の畦にあげられてあったのを持帰ったのではとのことである。

あと一面の軒平瓦は、博多遺跡群の立会調査で得たもので、今報告に併せて紹介するものである。

1は、ほぼ原形を止めた軒平瓦で、瓦当面の剝落が残念である。何れにしても、これほど残りの良いものは珍しい。

瓦当面には、主軸となる一条の波状文、その上下に二個の唐草を付して扁行唐草文を構成する。上縁には、円く平たんな珠文、下縁と側部に外向陽起鋸歯文を配す。唐草文は狭長に流れておらず、老司Ⅰ式の特徴を備えている。七世紀末から八世紀前半に比定される資料である。(1)

全長41.4cm、幅32cm～31.7cmをはかる。表面は、瓦当部に向って斜格子のタタキが施され、段部付近は横方向のナデが行なわれている。内面は、布圧痕があり、瓦当部付近は、ナデ消されている。模骨を結わえた紐のあとも見うけられる。暗青灰色を呈し、表面は殆ど風化をうけていない。

2は平瓦で、浅く菱形に近い斜格子のタタキが施されている。内面は粗い布圧痕があり斜目に紐のあとが見られる。一方の端面が残っており、内側から約3分の1ほどの厚みまで切り込みを入れて分割したのが判る。淡い褐色を呈し、焼成は良好である。

3も平瓦の破片である。表面に深い斜格子のタタキを施し、内面は、端面を整形する際に縦方向に削りを入れて布圧痕を消している。淡い褐色を呈し、焼成は良好である。

4も平瓦の破片で、須恵質の堅緻な焼成である。表面に5㎜角程の細かい斜格子のタタキ目を施す。内面は、布圧痕が見えるが、分割面を

調整する際、内側も部分的に削り取っている。

５の軒平瓦は、博多遺跡群の54次調査（博多区冷泉町二丁目128－２）で、十一世紀後半に廃棄された溝に伴って出土した。瓦当部の拓影にあるとおり、版木がずれたのを[(2)]そのまま焼き上げており、珠文に外枠の界線が刷り込まれている。瓦当面は、扁行唐草文によって構成されており、上縁の珠文と下縁と側部に外向陽起鋸歯文を配している。老司Ｉ式に分類される。表面は段部を主体に横方向のナデ、内側は粗い布圧痕を止めている。白灰色を呈し、焼成は良好である。

博多遺跡群では、遺構に伴ってはいないが古代の瓦が時折出土する。上呉服町の道路拡幅に伴う調査では、鴻臚館式の軒平瓦や老司式の軒丸瓦が報告されている（Fig.7）。しかし出土量は、他の中近世の遺物[(3)]に比べて極僅かである。表面に縄目や斜格子のタタキのある瓦片を含めても、瓦葺建物を予想するまでに到っていない。

博多で多く出土するのは、下縁部に連続する押圧文を施す軒平瓦と草花文をあしらった軒丸瓦である。これまでの調査によって両者のセット関係はほぼ確実になった。平瓦や丸瓦は、厚さが１cmに満たない表面に縄目タタキのある須恵質のものが伴うようである。これらの盛期は十二世紀前半と考えられるが、建物の位置をはじめ解明はこれからである。

以上、古代瓦について解説を行なってきたが、入江氏の資料は今報告を機に福岡市博物館に寄贈いただくことになった。

註

(1)小田富士雄「大宰府系古瓦の展開」『九州考古学研究　歴史時代篇』所収、学生社、1977年。

(2)福岡市教育委員会「福岡市埋蔵文化財年報 vol.４　1989年度」1991年。

(3) a 力武卓治・大庭康時編「都市計画道路博多駅築港線関係埋蔵文化財調査報告（II）博多」『福岡市埋蔵文化財調査報告書第184集』福岡市教育委員会、1988年。

b 松村道博「同（Ⅳ）博多」『福岡市埋蔵文化財調査報告書第205集』 福岡市教育委員会、1989年。

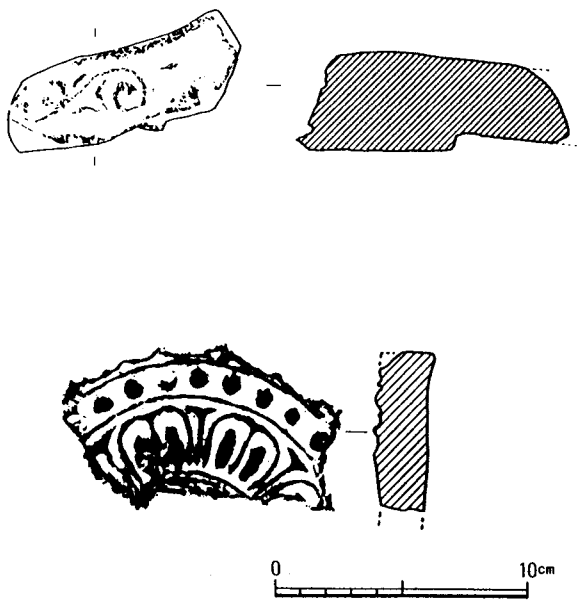
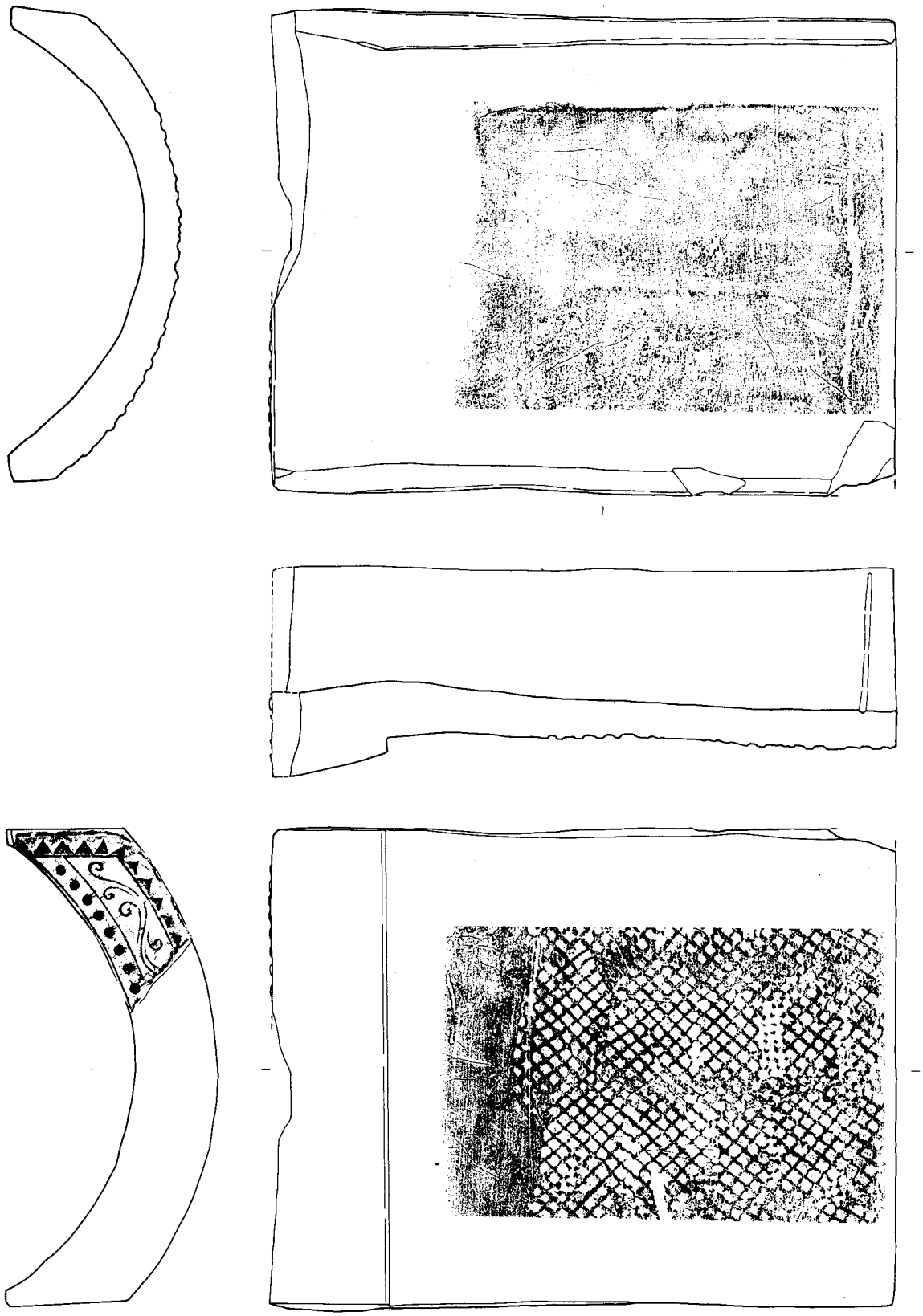


Fig.7 博多遺跡群出土の古瓦（縮尺1/3）



1

Fig.8 軒平瓦実測図 (縮尺1/4)

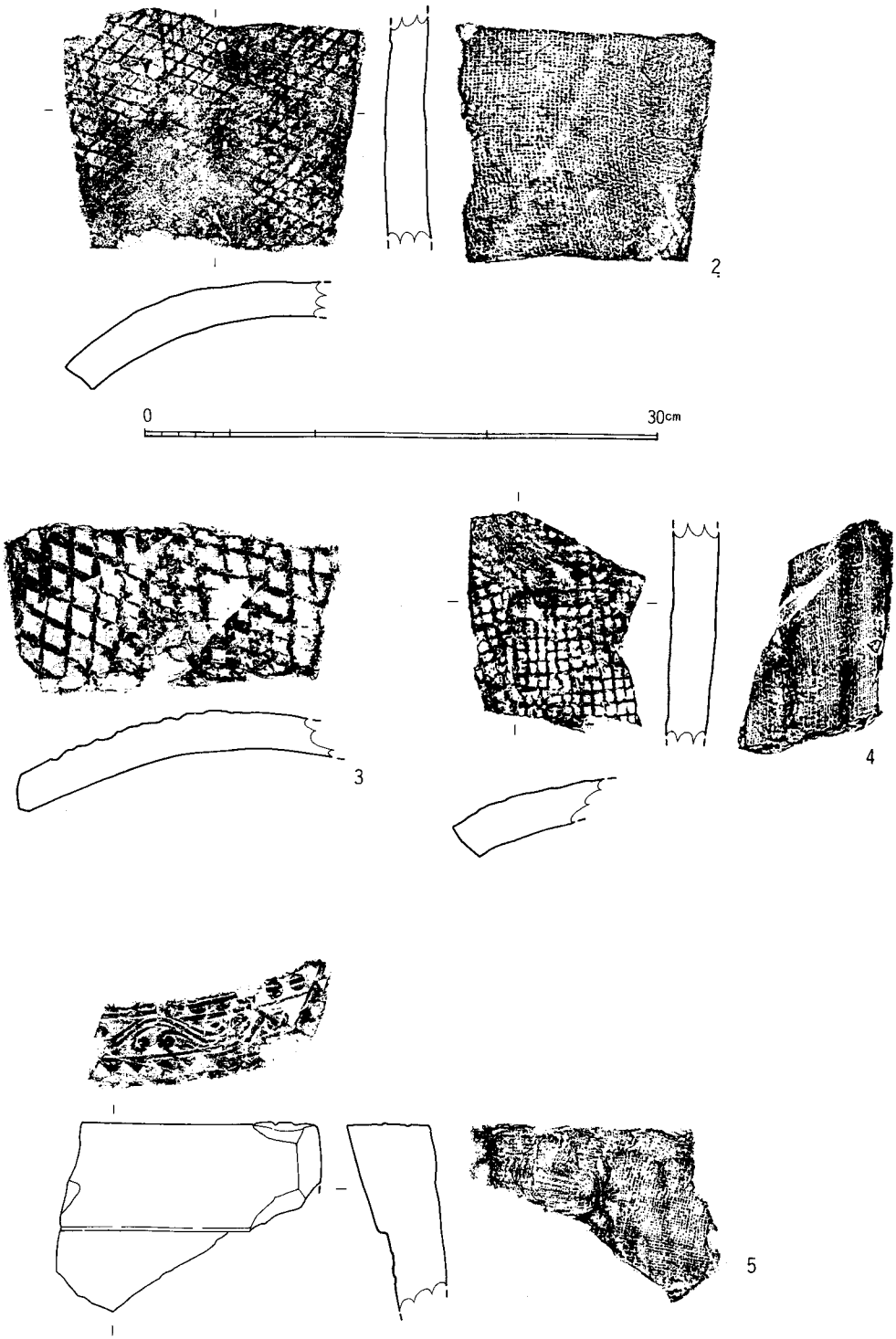


Fig.9 平瓦・軒平瓦実測図 (縮尺1/4)

小　結

今回の報告は、溝と土壙の調査が主だった内容となったが、各々の用途や時期については、推測の域を出ないのが現状である。

溝がどのような平面プランを描くのか、遺構の性格も含めて、先学諸氏の御教示を賜わりたい。筆者は、SX-01を墓壙とした場合、墓地に関連のある遺構あるいは館跡の可能性を認めたいと思う。

溝に切られたSK-01～03は、糸切底の土師皿・杯を共伴しないという理由から、12世紀前半を下限とする時期としたいが、一括性に乏しいため確証は得られていない。またその性格についても現状では、明言を避けさせていただきたい。

今報告では、個人の採集遺物も紹介させていただいた。資料的に重要なものは、できるだけ多くの市民に見ていただきたい。今後とも、協力をお願いし、私どもも活用されるよう努めたいと思う。

調査区に完成した共同住宅

Summary

Ohashi E Ruins are loacated in the westside of the Naka river. This province belongs to South ward of Fukuoka city. We designate one of the areas for rescue archaeology during the 1990 campaign "the 3rd. point of Ohashi E Ruins." Ancient temple, Miyake Haiji (三宅廃寺) is thought to have been 200 meters westward distant from 3d. point.

At the 1st and 2nd survey, we found remains from eealy Yayoi period to Kofun period and the Middle Ages.

As a result of this excavation, we recognized a part of circular ditch and holes. According to the types of earthenware, the age of them are thought to be from the 12th century to the 14th century. We guess the dich rounded graves or a castle because it had entrance. Though the space of investigation was small, we may decide the character of structures in the future.

In addition to this report, we introduce ancient rooftiles, presented by Mr. Irie.

At the end of this study, we greatly appreciate advice and aid by many persons.

福岡市埋蔵文化財調査報告書　第279集

大橋E遺跡　3次調査　1992年3月13日発行

編集発行：福岡市教員委員会

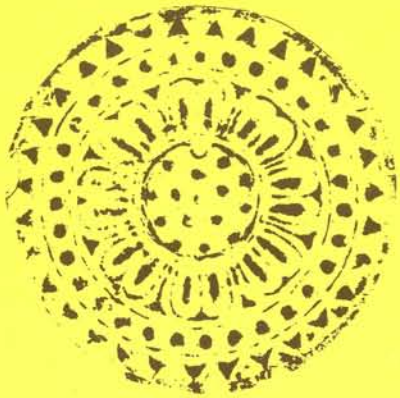
福岡市中央区天神1丁目8番1号　埋蔵文化財課

〒810　☎092－711－4667

印 刷 所：有限会社　松古堂印刷

福岡市西区周船寺1丁目7－64

The general report on the 3rd. survey of Ohashi E Ruins



三宅廃寺出土軒丸瓦

1992 Mar.

by

Fukuoka City Board of Education.

大橋E遺跡3次調査

福岡市埋蔵文化財調査報告書第27集

1992

福岡市教育委員会